

薰蕕錄

利

增  
775  
34





門 4 曾 4  
冊 775  
卷 34

荃蘊錄卷之九

目錄

春臺獨語

水博泉南留別志

餘卮言





薫箱祿卷之四十六

春香獨語

目錄

- 一 詩歌の沙汰
- 一 和歌絶妙の沙汰
- 一 古詩感慨の沙汰
- 一 茶の湯の沙汰
- 一 俳諧の沙汰

中村直道輯録











出するのいふのちと見るありし詩とるる暇も欲とんぬに  
歌の後とすむとせむとありたり美系集のそ風雅の  
薄魏の古詩とともて稍盛唐の詩とともてあるもの  
古今集の然正しく盛唐の詩と標拾遺の二集は盛  
唐に初唐の詩とともてなるあり拾遺より新古今の  
集の中唐晩唐の詩と宋の詩とともてあり新魏  
よりありはけりしとす初唐の時代と考ふに我園  
元正聖武存遺の時代とすく唐の玄宗の因元天寶  
の時とありは法華信の仲唐古梅公のめき人へ入る盛  
唐の禮樂文章とすむゆりて叔少弘りや叔少弘り  
自れく唐詩の凡侍の仲唐仲唐此をて承とるる  
りとうねむりのそ盛唐の詩の位候とて李太白の詩

肩日月の詩と曰格なる一一定歌御天のそとあり  
なありはけりは格一標氏平城嶺城の時と入るる  
大唐の中唐のそとありて唐詩格調か一とあり  
われども我々のいふとありし白樂天が詩は唐詩後  
唐た成と白氏文集我々のいふれ若愚おちこれと好み  
けりくそや其のそとありて唐樂天の詩とす一とあり  
思ひてそ風詞と我々のいふれ一とありて  
三代集の詩と共一又徐平の私の付天とて宋の集と  
福氏朱氏学道りりれて詩の遺事と我々のいふと後成  
定家の学道りりれて百系古今集の凡侍かとうとあり  
後成と天台の仲法とありて一と三歌の詩と歌の極  
定一とありし一其のそとあり共刊とけりれ一と























首す次は茶碗の袋をこして足次は茶人の袋をこしは  
茶杓と礼をするこ糖は炭をたくも子細くするこれ等の  
炭を煮ておろし煮たりしてこれと煮じ瓶は花と色を  
ほむ入るこまのするらとて茶びといふらる一編の  
りりといひていりひのゆるい徳の維摩居士が方  
丈の室を今がうせむくして小窓をぬきれば白雲も  
暗くぬいぬく思ひておろしの物賣のやうして  
くらりくらりといひて入る息あがりてなごらごら一飲  
くお物も人のにはよのこむむ物斗あるあつたのいふ  
んまひせらるるもいひてぬ必ずらえしするも若しこる  
事もなごらるる思ひて汁たづらげは茶もさるる  
又おねおろして家の作りより視なまをたよらりて免

づららるるやうに茶とすれども茶人の家にお必ずおれども  
ほそく陰ふれ骨もども風よきぬらりらわそく或は丸  
くゆぐみもるねとばなごらう用ひなごしておねおれら  
しくとて具するもの陰はおねと足の手をばはひて平  
おねと目ふおろく茶人のおすここのあやうづつ何本  
と笑うくやうく一に本とまひたるものや茶のたの  
むらり漢去るといふお初のは茶とめむ半始まらうといふ  
唐のやういりてせよさうんよりる色令陰羽あはれり  
魚令ハ茶のちと作り陰羽の茶と取らりて付の茶  
或は熱湯は湯一或は茶とあすと抹茶といふ熱湯は  
照してのびる今の茶人の用ある茶より或は酒とた  
あすと茶といふも熱湯は照して飲茶といふ茶



茶と用ひりし今の人のする業の如く陸羽が茶を愛し  
或は論するにあつて撰むる事一つまびらつ成るの茶は  
まづつり陸羽が茶として世にまゐるの茶人の  
似たり陸羽が何れか伯態下りふ人も茶とたゝかんで  
茶の道は精しつりけり季卿といふ人悪む季道子と  
してまゝ御史の官に天子の使を命じて江南  
の方にわき陸羽といふ所の陸羽といふに或人か  
伯態の茶の名を達せりといひしやうて伯態と陸羽  
は後して茶といひせけりまづ伯態の茶はまゝ  
の帽をとりし茶をとりしに茶の名をとるは  
名して法のやく茶とす別も例もろく志目と撰ひ  
てお茶のといふとまづり茶におけりし茶の二をすり

て止められお茶といふものつりてお陸羽を傳じて茶を  
いひせけり陸羽の茶を名て茶をいふをよまてつり  
まづ法にまづ伯態に回し季卿茶とばのまける  
まづは人の仕事とてつりしやうてまづはひけり  
命じてつりし茶を陸羽といふまづ陸羽大に名て  
まづ茶としてつりしやうてつりし茶を名てつりし  
茶を名てつりし茶を名てつりし茶を名てつりし  
のまづはひけりし茶を名てつりし茶を名てつりし  
照院の茶を名てつりし茶を名てつりし茶を名て  
天候を名てつりし茶を名てつりし茶を名てつりし  
まづ茶を名てつりし茶を名てつりし茶を名てつりし  
今の世の茶人のまづはひけりし茶を名てつりし



とるべしをさひの業人の利徳居士と祇陀寺利徳  
徳力の徳つよと美徳なる者の唐のせとて肉と茶を  
樂しむけるを唐の徳産留とのたのみには飽て  
利徳々美徳の業のみをさひ大慶言雲の美徳を  
さけてつる成をとちつらひてを肉とてつる業を  
取して人に飲せたまのみける元徳力の徳つよ  
美しくやうくさるの業のみをさひ美徳なるも  
一箇のつらりなれを法くの徳つよつらり一箇のつらり  
ちよものをぬむれ業人のあす業をく美徳なるも  
美徳なるもぬむれも美徳なるも美徳なるもぬむてよ  
ちよしするもぬむれも元徳力成なるもぬむてよ  
徳のつらりなれを法くの徳つよつらり今の日も

を成入己が好むふら美徳なるものと茶り法するはんぬ  
るるり九万の徳の中に四くてもさるもの業徳のつらり  
の上の徳つよとあるの年と徳れを必す成徳なるも  
ちよるもぬむれも美徳なるもぬむてよ美徳の徳つらり  
何と四くてもぬむれもぬむれもぬむてよ中につらりぬむ  
食の徳つよもぬむれもぬむれもぬむてよ茶々の  
中よて茶をさるもぬむれもぬむれもぬむてよ新し  
用つらり者ぬむれもぬむれもぬむれもぬむてよ何人の徳  
何らん徳もぬむれもぬむれもぬむれもぬむてよ清い  
よしとぬむれもぬむれもぬむれもぬむてよ昔は徳つらり  
ひん徳車十二乗照しけるもぬむれもぬむれもぬむてよ  
徳つらり明月の平の徳をぬむれもぬむれもぬむてよ







と浪の茶記と月も一茶記とつゝとちか〜とと申す  
さだま〜とちか〜

能治の沙汰

一能治と和歌の一神と古今集に於ては史記の階智治の所に  
地志が歌と載せて階智のよ〜と云り能治ははたふれと  
〜とて人ともらこばせ人のん〜けふと云り是古今集と能治の  
と能治ははたふれ能治の字は階の字とつゝ移して〜と云ふなりと  
能治の字ははたふれと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
書さるゝと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
の〜と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
の〜と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと

これ能治の字と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
末世は登ん也と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
はたふれ能治の字と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと

と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと

ら〜り月のいろ〜と云ふなりと云ふなりと

節これ〜と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
びて上あふ下の句と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
て連字と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
句と二人二句と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
の連字と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと  
款人も先と云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと云ふなりと























ハ都のまてりともるす今の三流横笛天ハ一三流の横笛  
中ハと三流の横笛ならんづき物ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
つやハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
いハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
うハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
こハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
タハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
こハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
多ハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
今ハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
凡俗の素紋すりハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
みるハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由

白拍子今欲をいふものハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
吾名沙ならんハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
次ハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
わハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
とのハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
と者の女侍留層ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
びハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
因ハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
ハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
考ハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
その凡俗ハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由  
そハ一三流の横笛ハ一筆ハ雅楽の歌歌ガ由







物—この—はに筆をあらせし—  
若守寺の傍其世を思ひしにせし—  
を分て世のともく遊びし—  
は世をなすいひく—  
も茶のぬきり—  
はと号して—  
てま妙の歌びと—  
るまなく—  
ごしに—  
うが甲—  
汎まを—  
望—

あせは—  
とて—  
す—  
上—  
世—  
む—  
鄙—  
は—  
わ—  
の—  
止—  
物—  
と—



好まぬ一げぬあふや好む老あふく只盲法作世人の可化  
もくやぬれは凡俗を好むやのちや

### 樂美の沙汰

一第の本樂美申ふや今つくごころ信申の歌びぬぬれが  
流石位と人のませり申候一くす婦女の申し歌びて  
と流奔をすしむる害を一と流をいひし津海甲と流る  
くくおきばはらに坊まう信申よそと法宗の遊ばぬを  
ぬし今いき人と先を好むまじき一術しき老を  
江戸の中を流らあはれてと第の考をぬすず只と流  
の考のくちまじよみちて喧しこれ盲法作よと替女  
よと第ひく者今百人よ一人し凡俗やうく術しき  
凡世ぬく

### 猿樂の沙汰

一猿樂といふや玄意法下書すといふ成道門よんし  
流念の北條家の所よりみし一と申き大明し人に其物を  
初りんぬれを以て作る人多くは佛者成ゆへに民あふ  
猿樂をといく抱いたのゆにせしとととらなるの意今  
に是を申すゆにんし一河をすしむりよつたて其河の  
其ゆに付一河一河一河の宿主の技を申す業あれど  
中流の古人持と紙せしと申すべし猿樂をなすは其の  
形も然しとととととととととととととととととととと  
只笛鼓もてとととととととととととととととととととと  
忌りしに心附らるる君成りし流の格技をいひ一盲法  
作雅楽を好し一がたよはるしをいひてぬかあふり亦或家



のまゝ人様楽のうゝふ拍とありて一表と瓶ふまゝにやめて乃  
るしと不作と學ひて格楽所と打交りて色くぬのこ  
ことなるておるるでするはまゝさるるたふれす是國  
まゝくは作の亦家とりひりて天の祀後を好て自ら其  
亦作となして樂稀なりりて初なく天下を失ふことなり  
五代史よるてより祀後をその世の教をいし士君子の祀をい  
若し平相國の自拍子を好まきとて故に故女佛をいし  
自拍子とめし舞せしものとて宮女をいしをとりせたるよ  
あらず澁念の相撲入たり回樂を好しと自ら其亦作と  
つるに如す相撲入たりすことなり拍りす今止んす  
ありし人と格樂を好むやどの人必自ら其亦作をいしと樂  
そす若の人は是し風俗のたゞゆる女の形體にお代回交

本記といふ世に智徳太子の大威徳を云とせよ志とて有て  
亦徳太子の四より本記と寫して仍作せりし由き世に出たり  
りて皆若よりりまゝ好む初と書きせり其伴は格樂を  
神代は格女といふ者なり初と智徳太子は四十六歳の格  
系あり白拍と思ふ若し若くは打の教二つを先教と  
教といふるべしとて書きたるをり大威徳よりりて若く  
誣ることよふものこそ書のをいして格樂ハ性たは國  
るるりぞしとてふたかりて南都の表りの系といふの國  
よりり格樂はなとて因襲とて由きは格樂とて神代  
おりのいふ成る御らん初と徳太子は初とぬのこをいし  
好む人もまゝ成申は前をいしとていしとていしとて  
この成る魚











こゝに若の首の羽のやぐちうらむる敷きてしるもゆのき  
事のことと預り今その物一と半と作り出さばまふも  
只中一と半のまをれがゆ女をよしてしるもゆのき  
ながしそあく斗りして洋陽ののめさし陰身にはずと探  
るそよ是よ今ゆる海教とさうたりたりうらうまやう  
よろしとあしと陰身よりうらうまやうとあて傷こし  
事と洋陽りよりそをそいふしとまらり言るん有法所  
替女をどの祝歌と寛文定室のはすでんを歌らうまを  
がらふ出るそ倍調あうらうしとまらりく倍初めさう  
おも小念しとのまじり歌の今歌とがしと倍しとら  
倍申の難しとえてよれ人のあてと祝しとまらりくす  
う原とそよ今すし時と調子倍くもまらりくそてまを

身にうましつひしてつくし半とゆと歌とて物け  
あうらう今有法所と考の曲とが神流す調子うらう  
まらりものこるそと原がくのめと物とらり祝しと  
あじとらりくつとまらり考のめとをさしと半と倍と  
か一歌が一々の月と十年の月と倍樂とつとがしとまらり  
あうらり洋陽陽の江戸那波のふらうす諸國のいふま  
まらりの風とて一と半とつたりたりとまらりくしと半と倍と  
洋陽つとと歌家の好く今とらりあう調子まらりとまらり  
けよみらと京那波のあひ想しと物けひしてよらひあしとら  
あうらうと原のあし何方の洋陽と倍考物流して物しとら  
さうしとまらりそのまのめしとまらりくしと倍とまらり  
まらりつととあねはまらり人京那波の洋陽つとをまらりつと



おけてまひさのたやん室永のちが一甲こり浄海と所事  
て京の浄海とを説くは江戸の人を収めろ一に享  
保の初より竹本こり浄海と所事してさその浄海とを  
弘む江戸の人又を収めあがり一に其な又都海と  
浄海と所事しきまて海一く丸一ころたを  
かすやうに江戸の人又をよみ納り具一もてさやす  
る海を一トさぬの人いりよ一不の法度き人言の上成る  
こころあきく一まてぬて年のぬいころるきり有て自  
わさきわしこわくことぬきあなる法度よてもりれよ  
一しきまて海一ころるたを納りころるさ  
志とよてきり一ころる日とら一東とぬ一とりさす  
一のころ浄海と所育法所事ぬのたのとすま一海一と

ころる士老子のころる納一ぬ人たは一言をなて所やう  
あしてき打りげくたの若しちりやをの末とつひを  
海一く止一き同儀るさずや漢去とて仇後とつひ今秋  
國のね書所あり威まといひて人と野すと仇といは後  
ね書所ありのころる仇後仇後とつひ今秋ね書所ありの  
程とて仇後とつひ今秋とつひ今秋とつひ今秋とつひ今秋  
によきあつた仇後とつひ今秋とつひ今秋とつひ今秋と  
舟の京とて交谷とて今監とつひ今秋とつひ今秋とつひ今秋  
官とて定とのころる宰とつひ今秋とつひ今秋とつひ今秋  
いでに舟のころる仇後仇後とつひ今秋とつひ今秋とつひ今秋  
うバ孔子とつひ今秋とつひ今秋とつひ今秋とつひ今秋と  
そね教す一ころるたの司馬と命して然ら一ぬぬり











ふゆのみひくすう 秋出のこころいふなむゆしは 白雲の霞にし  
くぐす物しきりしとめつしきりしとめつしきりしとめつしきりし  
自のこゝろも衣履を物に依りてきて昔に習ひぬれり切て  
人君様への儀式に依りての樂しき事なり年々くよ出きて  
四きりしりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
多し物しきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
ゆき中尉と履よきき履は尉よきききりしきりしきりしきりし  
美るれよそのののいきては其の人の風俗こそこそなりしり  
これ然るしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
女し方て寛永のは元年の歳よとぬりしり

男女衣服發卷の沙汰

一考をねしこいふ章のうけ章の袴と次後しきりしきりしきりしきりし

の襦子とけりしとよきき履はきりしきりしきりしきりし  
ゆてきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
し物極をててててててててててててててててててててて  
除きしけりし履はきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
入るるしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
ひきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
の人は昔のものとけりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
あしりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
てててて男女の衣服をきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
も十六歳と長に神衣をきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
極しきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし  
二人きりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりしきりし



今から下りた八九寸にぬけり冷とんぐして袴のやぐりの  
肩衣より麻の幅寸すけりまてす。大享元祿の比かを  
一尺より下り寛永のははぬ女細く麻漉して髪と束めて  
其上を黒き漆にてせしに其は麻漉と止めて減りて  
祿永の間に結袷して元祿後しりもの化りて海内婦女  
皆是と用ひそれが終りてをるもやぬて**戎**まき  
是とて**袴**やちり帯の人の髪長く長とたけは余  
りやぐりてしりてをれば髪かく**袴**とよて  
多き女の髪の中と或は切り或は剃りてかす今の人の  
すては髪は元男女の髪容我らてより成なりりり  
らん今昔の形も及昔の人の髪をくまきゆは三十年  
以来にはた人の帯の風俗とまぬるやと或は人の髪はりり

只京の婦女の昔も帯衣すりの束はなつらぬは人の婦女  
外にやうき若くはまて思ひこもては面とついでに  
我輩より寛永のはと老るるうき今少き袴と取らひ  
まきののこもて**あ**とに打ちさらしはやう成りてたをり  
も何もそのけいもさす男の髪はひりすもの髪はは  
倫堂と肩のふのまのびるうづしうす糸のやくら帽子  
とやゆりておきてとやくすも有たの袴は**度**初めく  
物とつり分て貝斗と取いて**道**とゆも昔の女の  
人のとぬ髪を多くゆりてやみははの男は神のうきと  
行へて或は恥と神をて**鏡**とまきお斗にひら  
めておどすり考あくはも女の却て縁のうらむと  
出るありはも男女とよきと**若**は士君子を学問







より定むる格式ありて奪くす流るるに礼法と奪くは  
と争うてはのけりゆり今法皇久しきにより徳候き  
一及び小派の士も者とうごり徳候と奪くんとす是等  
侯爵の御まうとて一万余奪候放捨ぬれ有派の士も  
よつて小派の士も御介食因一高格とてのゆかのみ  
といひぬれ位も人も高格と奪れやまも高格と奪れ  
棄てて士も吏と奪り悔者にぬれ風俗なりかく斗りの  
多病もて中もていかりさゆりまひすとて一たもれ  
中流の人位古に男女を判別するも一五刑よ及びぬれ物  
罪の者とハ判別して以發刑けりぬ法候てより男女發と  
判て傍危とぬるも傍危の介男女を發と判りあり一  
ぬきせよ純純の天國の表國大集よて天下の人悉く天國

の風俗として以發と判發の判とわいゆりぬてきこれ年の  
尾のぬれぬれ發とて是中流の風俗の大賣の表國よても  
中流のぬれ傍危の介は發判りあり一川のゆか發と  
の中よ月代とて以發と判りぬれ判と判り發と判  
扱のふらぬれとてよ棄とてり捨て捨の尾のぬれぬれ  
人じまは判判りぬれ一是も表國と多びて判と判り  
忽ち一表國とてり一もよも止ぬれ一且月代とてりし  
てわいの發とわいぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
つて一も判と判り純純の表國と判りぬれぬれぬれぬれ  
判りぬれ判の風俗のぬれぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
の發のぬれ判て發と判りぬれぬれぬれぬれぬれぬれ  
以發の末と判りてみゆりぬれぬれぬれぬれぬれぬれ



七一の位とて年と流げは女人の男のやう男を令く佳作とぬ  
こころのたあゝの経紀の表とらも又其のつゞけは佳の神  
ろりも命にあゝず是付建てされは左の聖人たぶらとまひか  
ろり流とて風俗と叙せよとらつて此とてふけをなす  
其術は何れとてや、三業とてひて信業と禁するより有るを  
たきむら政の要務なり

文政六癸未年十月十九日信寺中氏本家之 中村直道

董菴録卷之四十六

董菴録卷之四十七

中村直道集

水足博泉著

なる也

○黔首と為らるるの秦の李斯焚書の政は始りて  
さよわくも先王の作家黔首と為らるるはれも其  
を一秦とてとて孫孫とぬ先王の大智とてなれ  
今一其れは先王の世を後の制ありて後考意く目  
君子とて庸者凡庸の輩は先王と民はかきなり  
智れ一野を遺賢とては是なり病家ありて後賢と  
依一士軍ありては大将と依一士軍ありて後道  
方とてなりては世を問ひては先王の治終  
ほとてはとて教へる後とては一月令の政人本







跡今知を郡一地の名も府の字あり不右府の地の名一  
鎮守府を幕府のいふも又甲府監府長府防府府  
中府内のれもより者も儒墨とのいふ世を儒仏と  
いふ今も儒墨の性喪為葬を墨の道不股喪水火  
五喪の佛の道く墨く佛く曰くかきもいふも  
礼を休むのいふれ一哲人の道きく礼とせんは礼を  
時より制く時々の制よりけりて古礼と傳り儒と  
云後儒の傳り礼を休むり礼を休むるありて更今儒も  
汚濁くちより小学の字書く童子の学ちり文字と  
りふも然れ章千字文の類く後世の小学も書書く  
物もより古今の愛のありてれ一太小戴の曰く礼書  
のれも禮礼をいふ列一天下の通智も大戴礼を

當者よりいふもより漢まは孟子荀子を牛角の書  
をれも孟子をすは經より一近世の論をく物  
荀子のいふ人稀きり書のいふ人の字も字ありは  
○魯派の廣成宰相といふもあきくも事之宰相を  
別相國をり

- 夏衣の晁監と送る詩九列といふも毎卷九の  
事より一一向を推着日八日向のりより一
- 上野下野上総下総の上下備の幕中後越の幕中  
後皆幕部の前きと上より幕より幕終るまでと後  
とて豊後肥の前屋をたより外海といふこと  
幕より内海といふこと後より幕より一
- 仁術字同いなく歐陽をさすより一りは文章



是れは二五は河圖洛書と云ふも之は童子  
問と云ふは道春の表は及真と云ふなり

○水戸侯の時序忠臣櫛子と云ふと類する文章と云ふ  
有と時序の二字は不首の意と云ふと定めて其の  
時序の表はききり時序有兵延後季子の表と類する  
もききり一時序櫛子と云ふと類するは古威概  
きわぬなりと云ふ一金仁山と云ふ孔子平于魯と  
書る同日は後序と云ふ

○書は本文は時序なり註は士はなり註のまゝに註  
字序のまゝに注せの字文を云ふと云ふなり

○省菴郷約の跋は茶葉と云ふ酒肉の跋は酒肉の  
多禮なりと云ふなりと云ふ御飲酒の跋は酒の跋の

味をり帯を同敷法造の味を金飲の用は酒は  
と云ふ好む人ありと云ふは酒をわらわらと云ふ

○御飲酒燕禮射礼按重祭禮の時ありと云ふ  
常は酒と云ふは一軍の酒なりと云ふは酒禁教を  
ゆりて酒と飲しむると云ふ酒禁教と云ふは後世の  
飲酒戒道家の禁酒下の私制と云ふなり

○時序と道真は優劣と論を云ふと云ふは時序  
時序及真は寛く記して後道真時序は年  
寛く記したるなり

○守屋と云ふは常ありと云ふは是れは古備と云ふ  
の守ありと云ふは道徳なりと云ふは古備と云ふは  
の守ありと云ふは守ありと云ふは守ありと云ふは



聖人の道は近し〜控高道春利髪も又信の〜  
僧とりあはし〜

○春秋は公羊穀梁の氏各一家と専り〜事皆由へ〜  
公羊と穀梁の二氏の説は二氏の説と定むるの〜も穀梁  
と穀梁の若し〜又あり〜胡氏之傳と〜して春秋の  
考原を〜義經の初〜百人と十なり並傳〜其子の説  
も切増〜きけ〜とあり〜周礼の及字同の道  
全く同〜三傳のうら公羊穀梁の字と傳り〜とあり  
邦夢の由と穀梁の由は邦とあり〜檀弓は邦夢考は  
とあり〜夢の字は書り〜よき〜董仲舒胡毋也れり  
云々と云ふ〜

○十月は十人の目より十手と十人の目〜

○月日六日〜通〜非〜古月六人の目〜人の目  
二目〜六眼と書たり〜人の目〜

○中國の地理は北重なり〜南軽なり〜北朝  
は〜南朝は〜歴代は〜北朝は〜南朝は〜  
案り〜本朝を東を名〜西を名〜故は〜  
の理と〜門と帝都は〜事あり〜  
字は〜門と〜

○周文漢邑と制〜四方道徳の物〜  
大抵建都を一陽と〜  
主人中央と〜  
少〜偏を〜

○本朝の人性彫刻屈曲〜











最明訓はるる

○奈義の篇は孝とけり曾子は浩落樹了海の新  
依りて

○傾城は枝く治帝は休儒くちよの色長きり庶平ハ  
部強く庶強と請く儒者とはなり

○握奇伝ハ兵書の奥秘く管輅注を及りか次臨  
符道德をよつく易上下経と及りる孫子を  
繫辭莊子の文と似たり

○明朝は天文圖讖の学と禁を本朝の天学と好す  
ハ是よわつけらるる

○年中の事ハ大の道家の方多し民間茶時の  
俗として道教なり

○繫辭傳ハ乾坤とさるる秘文ありと序卦傳の終る  
もつらと参同契とよむは洛周く神代のを又同  
書者知りて思ひ中庸の書の教むる一人  
の道ハ秘傳ハたもれも此一件を其人よあらんハ  
浩りか

○組練早く焉く辞と事とを教むは天下と忽  
ちまらぬ納れり不昧者心其不色なり

士農工商と四民とありハ天子よその辭をり天下を  
りハ士ハ士なり農工商ハ民なり諸侯卿大夫士皆  
天子の元子とありと禮記にけり農工商と其職  
一なり工を百とて其事一なりと禮者職人細工  
大工僧尼巫祝醫法の教皆工の属也







部り五万世詩道中興の律に於ては、  
これ悉く制し終ふに付りて、  
禮樂之備りたるは、  
以て之と治りて、  
平ねりて、  
天下と治りて、  
言七言の四より書ひしより先王之古と爲て、  
威一の如く、  
ひりて、  
禮樂之備りて、  
と書籍なり、  
好実道香た危丁の

上へ能く雖も、  
治るに、  
再ハ、  
礼、  
詩、  
書、  
礼、  
樂、  
之、  
備、  
り、  
て、  
以、  
て、  
之、  
と、  
治、  
り、  
て、  
平、  
ね、  
り、  
て、  
天、  
下、  
と、  
治、  
り、  
て、  
言、  
七、  
言、  
の、  
四、  
よ、  
り、  
書、  
ひ、  
し、  
よ、  
り、  
先、  
王、  
の、  
古、  
と、  
爲、  
て、  
威、  
一、  
の、  
如、  
く、  
ひ、  
り、  
て、  
禮、  
樂、  
之、  
備、  
り、  
て、  
と、  
書、  
籍、  
な、  
り、  
好、  
実、  
道、  
香、  
た、  
危、  
丁、  
の、







と事とを悉く記傳あり 經學一經のつゝ古學滿經  
通門と宗學皆明經の律令并々邦の律令格式  
官制講學地利水利輿政兵法を一家と考へて  
皆明經の美術律曆天文と筮日者臨陽の祿  
命藻鑑を一家と考へて皆經道と云へ 醫法  
五道といへる並に尚考へて 今一區甚多しと法  
瑞所甚少し 古今の書あり

○神道とは巫祝の道と佛道とは空の巫祝の神道と  
卯ふものはあつて法多のつゝ一人文明の法  
聖物とは神の供なりは文明の法善人ぬると巫  
祝の祝大なりあり

○道家と法共制のつゝ一つは丹家練丹と事と

罪天と極とを二つは方家方術と事と有疎と  
極とを二つは具家修養と事と有生と極とを

○道家と神化家と古来兩程の文帝は貴元法淨の  
教と考へて道家の武帝は端修養の教と信  
ずる神化の法世命一なり家と取つてと流始て  
方なり何日罪天尸解登仙之地成佛任運生  
留記の定名なり考へてと考へてと考へて

○漢音ハ音音ハ音音ハ江音ハ音江二家傳未ル音  
なり

○撤人必於其倫古人の道之菅巫相と原小以柳  
正成と諸葛孔明の法を倫倫と考へてと考へて  
巫相と韓文公の法を正成ハ許遠の法を正



親房の在原は此をへし孔明は人誰か知らず  
○孟子は那の心を智の端と流るる回已一日千人  
と賜て其原凡千百年儒者敬祖の在とて通  
鑑綱目千載の人以是也 宇宙の万完き  
人なり 陽明吾師とたれ市人皆聖人といふは  
とらふへし 是れの本意なり 學問の境域曰く  
ち此は上天の物と生るる業ありと毒あり 麟鳳虎狼  
破鏡唾と育つる堂も此無類の公なりんや 竹木のまら  
ゆりあつたもたる物ととぬれとと捨ん吹奏不問を  
溶鑄のうらにありし書と徳めし皆しんといふ所  
あくとむおととぬれぬぬ人また人の心んか  
古今人物と海よりも若くは文よ今ぬ人と不毛とん

きはぬ人なり 是れは学問の事

○法を簡したる世にちりぬるは法をげぬれ  
罪一高祖周の入約法之章は法體を在せり  
一 學問の業もをて徳ひと徳もを充棟汗牛  
担可一 生の力とて一も表を窮めぬ  
と以準とせり 杜少陵讀書破萬巻とるたも  
二百巻之百巻と讀はは博洽の習ぬ  
何れも一 徳者一の學もも万巻を功かん  
かゝる海流十巻とても百巻より千巻を切あり  
よめハ 萬巻の切を讀む本一金粒一 事知識との  
法

○丹をりてとて下は繪具をけり 録者ハ事とを



天下の経典とをまじりつる道とを何とぞ捨ん人か  
性又かたむかひし成徳者其性かたむかひる後世の學問よ  
何とぞ又保まをりぬれまをりし中庸の道とを人  
る人へまをらむはたぬをりし  
○飛人として千載をりまをり天下の事誰か問ひ  
誰か問ふらん不昧者か自信しく後世の子雲  
と約のこをりし

各持たれ天下を造其法者そお宋文章  
十決及び書法發明之れを余作らり者  
これ一統筆と寫す年 翁某書主人

天保庚子と夏寫勝々 許九齋

天保五年の年言月十日若木岸に汎ひ舟の字  
あきし久斜りのみの中より抄冊よと  
乞ひくうりしぬ日し竹師りし文會雜誌の中  
あき子の事よとあり月三つしあきん

徳本と文とをせしむる事なかり水久平とを  
十七年あきり書讀と来前よ物とありけしとを



悦ぶ事一竹溪の行ぢられ水々の事と云ひ  
如くおもしろく著る大平の物おれいとも其文  
と解いしる事と云ふも文意も頼朝からいひ  
久良未おと云ふもち成平と云ふもの、頼  
朝と云ふ平のあつたお云の事と云ふ河の坊々  
あつた此の成の物と云ふは此の事と云ふ  
あつた事と云ふなりと云ふ

于時 天保十二年庚申年七月五日於城山林麓高橋  
官邸書寫之 中村萬長直道

荳蔲録卷之四十七

荳蔲保老之四十八

中村直道集

醉餘危言 九十一章

此書觀念坊よりいひし坊の親き友人の  
書物よりなりたつた言ふ觀念坊の親き友人

一 昔の病と云ふは故をいひしと知りし書物より迷ひは迷ひ  
と云ふの惑は愚といひしと云ふ書物より何事と云ふなり  
西人の書と云ふはあれらなりしと知りしと云ふ  
と云ふ事と云ふや今の世はと云ふ千年百年をたれ  
事と云ふ世の事と云ふよみしと云ふ事と云ふ  
方も度り知らん其智者其博士の心と云ふ事  
事の事と云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事







一 独標とまわつてくるの半あり仏の教とまわつて  
ぬら青き事とらうり思ふのまわりゆるあり方と  
観より佛のむたひとまわつて道ハ一とらうり  
末の世とわうてハ幾世とまわつても佛の教ハ一と  
筋とれぬはまへりたふまへひのちりくるむびと  
まへりくるも末の世のちりくるむびと一これ西の独標  
まへりくるむびと一千年のちりくるむびと一これ西の独標  
まへりくるむびと一千年のちりくるむびと一これ西の独標  
佛の教とまわつてくるの半あり仏の教とまわつて  
ぬら青き事とらうり思ふのまわりゆるあり方と  
観より佛のむたひとまわつて道ハ一とらうり  
末の世とわうてハ幾世とまわつても佛の教ハ一と  
筋とれぬはまへりたふまへひのちりくるむびと  
まへりくるも末の世のちりくるむびと一これ西の独標  
まへりくるむびと一千年のちりくるむびと一これ西の独標  
まへりくるむびと一千年のちりくるむびと一これ西の独標

一 独標とまわつてくるの半あり仏の教とまわつて  
ぬら青き事とらうり思ふのまわりゆるあり方と  
観より佛のむたひとまわつて道ハ一とらうり  
末の世とわうてハ幾世とまわつても佛の教ハ一と  
筋とれぬはまへりたふまへひのちりくるむびと  
まへりくるも末の世のちりくるむびと一これ西の独標  
まへりくるむびと一千年のちりくるむびと一これ西の独標  
まへりくるむびと一千年のちりくるむびと一これ西の独標

一 独標とまわつてくるの半あり仏の教とまわつて  
ぬら青き事とらうり思ふのまわりゆるあり方と  
観より佛のむたひとまわつて道ハ一とらうり  
末の世とわうてハ幾世とまわつても佛の教ハ一と  
筋とれぬはまへりたふまへひのちりくるむびと  
まへりくるも末の世のちりくるむびと一これ西の独標  
まへりくるむびと一千年のちりくるむびと一これ西の独標  
まへりくるむびと一千年のちりくるむびと一これ西の独標



一 世傳りり遺りて千載の久くはわね業として書尊く  
慕へども佛の教の道にあらざり西云より我邦ゆも  
ほへて今世の流りていもの史記漢書老子南華共  
卯古と書し又我邦の神代の故と半部くの筆もな  
まもよりの伴し書のいも流りて世の偉しき事の  
傳りて亦多し其世其人ありて其の世の流り  
おちり文をいこの世のいも流りて西云人も斬りて  
めく書きていものいも流りて其の世のいも流り  
まもよりのいものいも流りて其の世のいも流り  
もかゝる事ありて其の世のいも流りて其人の  
徳のいも流りて其の世のいも流り

一 我邦の古と書しりて其の世のいも流りて其の世のいも流り

書好りて其の書なり世も西云の創りてまもよりのいも  
これされど惜しむ人の多し世も人の世もいも流り  
よ世も詩文のいも流りて其の世のいも流りて其の世のいも流り  
西云の創りて其の世のいも流りて其の世のいも流り  
それともいも流りて其の世のいも流りて其の世のいも流り  
そのいも流りて其の世のいも流りて其の世のいも流り  
まもよりのいも流りて其の世のいも流りて其の世のいも流り  
のいも流りて其の世のいも流りて其の世のいも流り

一 西云の半と書しりて其の世のいも流りて其の世のいも流り  
のいも流りて其の世のいも流りて其の世のいも流り



まろとく西六舟の傍り又貨物と贈りてくちさふと突  
おろく此邦に送らせりや程なく為まろりたる共  
おも作して止るる共事さ同く天のまろり本  
とく同く心よまろりたる此家とく送して父の志  
めまろせり本ありまろりて送るたる此邦の人  
送らんまろと心よまろりたる共事さ同く西六  
より匠と伴むる人送らせり此匠のまろり此家  
西六の首の匠の送るるあまれば今の匠の送るる  
本まろりて心よまろりて送らせりまろり宿者の  
居るまろ何れも物調一まろ朝夕外まろ  
まろりたる知まろりたる此方まろり此方の人  
別まろりたるあまろ送るる人まろまろりて此邦の人

西六の書讀まろ本とゆりのまろりたるひまろり  
とく成人のまろり

一 秦の世も書讀まろ人秦の國主とまろりて帝の位  
まろり周の世も作まろり世に華りて秦の代も  
と名ひまろり古の書りの世も作り遺せる書紙  
強りまろりたる何れも横まろり博士の紙あまろり抗  
埋りて敷まろりたる今も書流人のあまろり  
くらとまろり共まろりて思入ハ一向ヒツムラあまろり思  
たまろりたる世も一まろり常りたる功カクシと名ひまろ  
めは常りたるまろりたるや周の世も鄭のゆま  
まろりたる世もまろりたる目まろりたる世のま  
まろりたるまろりたる書へてまろりたるまろり























雲漢進取章 九拾章

朱陵

以作之流古學以居之而瑞至若以台名也  
 解之精知之也高之好之至統名區迷之可  
 公不意亦後之也此自然之何事之也成就  
 下任之肉乳之末切之芝根之也思天多決之  
 風雅與風流同一也矣吾人多以風雅之言詩經  
 之因風小大雅之出之言多字之詩經之句語  
 物之卑者之志之風雅之信之憐一勝之  
 臨人之交不為情極之也皆風雅之風流之也  
 物之好之好之也少年之何之也之好之也  
 物之好之好之也少年之何之也之好之也  
 心得之也之好之也











梅贻

凡拾七章

朱贻

如治明日星条於此宅乞巧小集可致從是中  
無心終居吾家既治又治新報中其與之

存子可者之乃治來能年約而不具

幼者別之不能牛喘之近口口水也仍可思之

少艇用定可致之也

舟行甚速因心不之何故以此知之可法也

勝之世人在別之既治乃以標明之亦可及法也

以上

治治古法房之由治精之者入公學又之歷史也

一之得友即棄口平之相惡有之免角世之愛

廷時之操釋人情新中遠之歷史之功其也



訪書三終多事不業其外法音家餘力  
病大沙淡可成願

于蘭益常丁集思ノ系信之私叙列  
扶之予之わん戸

去年之益之京都人系之能登新少之贈  
風体格別之予之書下

宿早七月三半之八月九月之押物之白駒  
際亦之抄中ノ事油之之不和然之可致

覺悟之學業ハ殊文就之旨之研新可  
事

山康隆電見物抄年存之之是氣之畏  
也係遠行一向大依存之止之也

南窓寄傲解之作外之

以中江戸ノ文人ノ文一二是見戸ノ組  
稍嘉訊多ハ葉之毫之其真物ハ物得

明日水ノ前邊ノ所道途法依得之先ハ水  
清漂素勢勢之水之依之者礮礮於水中

陸ノ其量可中ノ河朔懸晃相同ハ  
水辺道途法同ノ由之考之

棹之緑河ノ方ノ川尻何方ノ淨地一有凌  
曉之物之可致

秋海常多ノ今從之盡之  
方所見之

年之海山ニ成可戸ノ法入田之可貴信日







古村 三通 凡三稿成章

朱陵

それお逢致相見公先以治家因縁は稱成治女  
全瑞をなすれは後之を譽れをなす外は女  
言ひん法向家無別業進しく毎夜分も中  
紙有心修りて法修之宗半年過く法別もいた  
と少ゆくく許し指指を存せし定まはる飛く  
弟に向ふ法出法修とを帝向ノ先夫人も湯治の由  
形もお慰めはれし修りて形も早修快法修  
法修一杯玉り知んおし法向也して法向方いつま  
しに向ノ先夫人上は戸中法中法修りて法修り  
細くは弟修高りし法修りて佛の神通はいつら  
んびりて法修りて法修りて法修りて法修りて

の三通法修りて法修りて法修りて法修りて  
り修りて法修りて法修りて法修りて法修りて  
おまんて法修りて法修りて法修りて法修りて  
その法向雲より法修りて法修りて法修りて法修りて  
り修りて法修りて法修りて法修りて法修りて  
し法修りて法修りて法修りて法修りて法修りて

一 先きある法修りて法修りて法修りて法修りて  
お修りて法修りて法修りて法修りて法修りて  
かともあよふ法修りて法修りて法修りて法修りて  
はく自然に法修りて法修りて法修りて法修りて  
そ月日過やとくは法修りて法修りて法修りて法修りて  
お修りて法修りて法修りて法修りて法修りて







あゝ元沙坊はなまのうらみ今と沙加友隔はゆき遠  
くぬの綿もして法察の海に世生るはゆめと氣を友  
を毎のあやう

一 此許も生法守と海有く是とありの情をわかれ  
戸崎初と戸法店トキハ揚毛と法守の價友候法海  
の金陵不傳り得まきハメと戸の打毛是下り思ひ  
出ー中ん然一今法禁海と世生るの言のうけ  
は遠下りい活白子と禁海と由是と何とて法守は  
生平日坊者定とテバヒカキハ別見とやうに法守ハ  
茶梧子ハシリ口ヒキるのハ沙波のや來世と地獄と  
ては戸の何しモとユカシクハ別章ハいしやハ飯スキニ  
テハハ學問ハ又を中んと察中ハ

進くく君れ郵致お見中ん志ハ

君候沖棧嫌克千里一同年名候ハと法守は静謐  
家大人忠仕健只下は年毎ハ茶磨とまハ寺  
存ハ不傳お者ハ戸玉山生ハ法心女思ハてりハハ  
先年と玉山一同ハ雲頂法門答ハ法守教ハたハ  
れハ法守がとてハ玉山を用ハと法守を交ハハ  
れハ法守の法ハハ法守不傳ハ外法法友ハ法守ハ  
法守登夜自由ハハ法守ハ今法守ハ法守ハ法守ハ  
用ハ法守ハ法守ハ法守ハ法守ハ法守ハ法守ハ  
君思物有ハ法守ハ法守ハ法守ハ法守ハ法守ハ  
法守ハ法守ハ法守ハ法守ハ法守ハ法守ハ法守ハ



秋晚冷々成寂あらうと周旋行の夢寐に書  
生ねと手あはれ見よん新識同遊の来りぬ旅  
情も消を致しうん眼もととる戸病着るとい  
ろく酒イタミか外ハ覺て戸は勿方をしん

一 只下春に兼止酒後と一向信文をいふ何人  
としぬ先達らも村生志生回生を連中中戸年  
兼る不信が心かり中る取悦りしよるも好  
ゆを足りし二百乃心夜々熟知致し一戸の心  
念佛も珠教の場下テハ年り中る致し推量は  
戸の心は家見かこは州境也か戸来酒の心  
不取者も成る成るあはれ大悦而堪推羅の一旦  
海流い少年中有るりる日月走過

ゆを何事もいふ成り終凡庸ノ人ノ朽  
ろてアもいふを成り終凡庸ノ人ノ朽  
人なりし月有る日し物来りて今忘し  
戸の心は家見かこは州境也か戸来酒の心  
文も止止成る不信大悦不過  
竟不信家先生は珠教の場下テハ年り中  
寸分の法益も成る成るあはれ大悦而堪推羅の一旦  
ゆを何事もいふ成り終凡庸ノ人ノ朽  
兼見は只下美質分り別と存珠を十  
知此上は遠志かこは勢も成る成るあはれ大悦而堪推羅の一旦

一 中尾久也戸有菴いふ不信の極中氣色  
と活杯致し一書も是ハ去年の時分是下は残











一 ちりし朱衣類を遺やましくも是も大方人の志。  
まづその中にも生れぬ也而し知るも有るはゆいお見念  
おまら別と愚縁も知用はやくも今を押梅  
ゆり地す帛も不貯はれ何そらそ新製過半ノ  
お方おりの外くは生るはれ用も費も不はれ  
いまた借金もかく用心を備へおのれを  
くも初旅の巾着といふも及不戸の或も架を  
少供一二部いぢりも快さしゆり成りゆり  
と相いみぢきも下有るははしゆりゆり  
まづいさうしくは周旋を頼む何ほとゆり物や  
らも海戸の家先生は次斗言下るはせま  
金いとも極まると入あふのあふり物も思ふゆり

春は江戸へとも木綿衣を又かきり人ま赤者あま  
三盛い不備向ゆ金く二階より日こやりはナシワメ  
キヤルサビシサツ志まゆりわあハやうましくは  
彌白子茶格子いりユカシク存出ヒメトは出舎り中珠  
言中遊もはれをた又思ふも物も燈り寂寥思ひ  
おし引かきあつらぬとてしるも今見ノ  
出方とちやをばは受て成り先きマテニ止メ中  
海音吹そ

片園子次郎

九月廿二日

下六

吉海庵しんげん

ちりし朱衣類を遺やましくも是も大方人の志。



頼山陽

四編に法蓮著お尋ね伏讀先以新正芝より千里  
法園結云

候臺沖檄孺克于恭悦の法地園境謚如法  
賢少年安治舎集依田由補仁の益少カル方布と  
不徳茶樹の辱生とを為迎東都是戸の法然念は  
下弓の事始と遊古先法候と結云一中の法勿  
取と云ふ不及奉米の今各遠境の初取と云謝法  
心不淑市を修めりともは許珍とも品ニテ別と云  
且ハ取の登れと情少慰の論賢者別一同奉謝の

一 法地近來行を法樹下戸を修めりとも品ニテ正月廿五日

紀徳丈名ハ世聲は亭とて又云有る玉山不修

之年内の事内戸を又題ハ記の兼作と持号  
中の法方ノ出云二子曰中軍も有るは主人ハ本

尾別人久ク長修の修學象骨ノ事華音ヲ習ハ  
中才一カラスキノ男と居宅茂大伴カラ法致

タガリ中のそのモツボク料理不修が食性ハ合ヒ  
不戸ヨリ中の不修ハ日午ノ因縁深クは故うイツ

テモ綱ノふくまきことやと一々好物と法樹の  
法不修と云ふノ草稿ハ法樹堂院と云ふノ下書ノ事

ニテ法樹抹見若ク且ハ分りカ子下戸の法樹と相成  
之儀と上テ下ノ法樹ノ中トナメテ法樹と云下



さうしては、  
中山

一 此地の河原、好猫の朱の、  
兎ノ餅ノ如ク、  
イタシムカシカシ、  
世界に朱の、  
てし、  
るも、

いかに先ハ少ク、  
りてハ、  
カリ、  
為ナドニハ、  
境ノ、  
金銀ノ、  
男之、  
仁モ、  
一人、  
カマシ、  
不傳、  
氣を、



一 正月十五日夜田助在亭之秘歌之去初有之  
如席法の兼歌高座中付の所感を戸に在秋の  
分寄懐く作一篇坐諸侯座下の不存之物  
の跡懐く法候く節座の志の又入法候く  
潤不地愧候く邪椿壽と家法思とて

一 休美子淨信心堅固ノ道人ノ誠ノ節ノ節益者ニ友  
全ク法候く切磋と申候く崔躍と先出中を  
覺不申候く以許二二ノ先輩誘引と名候く不若  
歴説候く良も乞之候く休美子古哉場ノ不トテ  
人ノ可一申候く先ノ高名ニ友ニ及人ノ今  
まも門ノ心堅固ノ學人ト成り候く  
かたふたり候くふく人ニ及候く

一 休美子家先生公友ノ別登ノ不及先師台法也  
此の法候く方候く所ノ法候く由候く外候く  
願候く申候く考候く下有候く候く候く  
此の法候く候く 二月十四日呈

茶格君  
浦白君  
士恭君  
子章君  
休美君

各々書







アルナントアム詩ナリト云ナリトハ存考ナラハ  
アメリ真景クアメリマケ野流ハカリニテ通ハレ  
あゝニテ一音

ありけり神代の活舌久わたの

いかりの今又言ふあ士のぬ

こ外なる西白のぬを別とすこの事と書  
竹の月昔の事宮口祖ノ靈廟あり本立テ大  
古に東ノ西カケ切ニ持持ナカシト是前流は物  
モライのクモリ中も是も直ニ神純ノ靈底ト即  
有り事ありし法は出因チノ下ニ流ハ即ち思  
あり伊も不伝キ同古ノ京者直ニ井ノ流也ナカ  
大改ナリト云ナニ日京流留住ナラシメ日大納

扱マレハ松ナ心ニテ存然ケヌ餐直ニ建ヤル先ニ即助  
方院居ノ厄者子ムスニ之節助一ノ家ニテニ世帯  
別ニ馳走有クハ家ノ大サハ中ニ格所ありの流  
辰ノヤラヤラナリト云ナシハ出流ノ間下ノ結海ナリ不  
及同苗内あきことニテリト云ナシ同流ノ何タラリ  
ニテ流中ノ海内の豪富ト流存ナリト云ナシニ日と区  
為ナト云ガハリト云ナシ習ハカ生々急々ト云ナシ日  
過ハ流中ニ物好ヤル者ハ成ル物ト云ナシハカギリ  
ノ事ナリト云ナシ芝居ハ小ナリ好者ト云ナシ無宗流  
ト云ナシ流中ニハ遊歴心カケ不ナリト云ナシ方ハ  
松子流ナリト云ナシト云ナシト云ナシト云ナシト云ナシ  
ト云ナシト云ナシト云ナシト云ナシト云ナシト云ナシ



浪華と云ふ所の中山老人、逢ふ所の乞士、恭慕、  
此のハサチ以不偏し、承不唐中人物、おと一、  
老人ニテハ、此の生、おじやと、ト、信、不、道、人、は、此、ニ、テ、司  
馬、仲、達、カ、ヨ、メ、リ、ク、ラ、ス、モ、ノ、ニ、テ、古、竹、の、大、量、如、海、珍、貴、  
人、ニ、テ、此、の、中、の、惜、ラ、ク、ハ、年、ヲ、百、年、モ、假、シ、ト、な、り、古、海  
老人、の、此、の、物、ヲ、存、留、シ、テ、万、年、ヲ、世、傳、留、リ、何、リ、テ、  
汝、の、も、今、世、の、中、の、眼、目、必、後、リ、也、キ、ト、若、福、祐、先、  
大、飯、輝、キ、ト、威、勢、自、カ、ケ、テ、及、ん、所、貝、塚、ヤ、  
中、付、大、量、芝、居、見、物、板、方、ハ、遠、リ、テ、ウ、ト、シ、リ、場、ニ、  
ワ、サ、ト、見、物、任、ん、芝、居、ハ、江、戸、の、大、下、テ、ハ、不、仕、の、後、者、ハ  
予、の、上、手、有、し、ハ、新、九、節、の、七、十、九、節、の、物、  
フ、ト、リ、過、る、女、形、ナ、カ、ラ、也、分、上、手、ニ、此、と、等、く、賢、い、ト、云、ん

蘇川八氣、解九浪華ノヒイキ日ノ出、テ、ヒ、レ、ノ、有、し、後、者、  
ニ、テ、此、の、海、八、平、九、節、成、下、の、明、日、中、ノ、芝、居、留  
十、節、を、見、下、の、此、の、雨、遊、歴、供、及、身、存、ん

一 福を又は力、解九カレ、イ、カ、ヤ、ト、我、身、ノ、身、許、宜、ク、成、ん、  
ウ、ケ、存、出、ト、中、の、此、の、草、も、本、と、痛、ん、傾、城、ハ、カ、リ、餘  
お、ト、此、の、今、成、ん、と、存、ヤ、リ、居、中、の、信、町、此、の、公、堂、ニ、此、の、  
永、執、手、物、ハ

一 福を又は今、解九此、の、多、門、反、出、ニ、テ、開、ク、均、等、の、成、ん、ヤ、ト、  
察、ハ、サ、リ、ナ、カ、ラ、也、所、定、分、ハ、毫、毛、ト、也、ト、云、ニ、コ、ミ、成、  
れ、と、存、ん、は、今、の、茶、飲、ハ、名、保、テ、此、物、ト、云、来、世、に、此、の、  
深、遠、の、成、ん、此、の、内、此、の、機、嫌、は、今、の、一、成、ん、

一 古者君の、解九此、の、海、分、ノ、外、ノ、此、の、公、堂、ノ、約











沙州進くお進は初一こも後と不仕背會堂戸の先ん家  
先生先年言ふは病くを治すは快揚くはた在承茶  
香菴確不違く強き事存は定下は先才根は之悦き  
喜ふ事亦不傷之外お書不戸作生くは治すは  
戸出は定下は急操者別は成成者行生くは主承  
鳩化くは言ふ成くは定下するは別は也くは

一 菴格洋白あ親友毎く連續お進は懶生くは返せ不戸  
は乃厚篤不棄く信はあせナラテハト不淡銘威  
戸の定下は定下くは一返り戸は是はかりは昔もあくは心  
結くは戸もは初は筆懶くは定下くは一日くは打退  
戸の菴格も大方たは初は初職くは存存は是ハ我輩ノ  
ち定下は定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは

たは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは  
て有定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは  
も有定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは  
は成中定下の賜力大かたは定下くは定下くは定下くは  
た一返りくは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは  
あくは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは  
中定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは

- 一 士奉見くは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは
- 一 此えお書不戸定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは定下くは







董菊錄卷之九終

董菊錄卷之四十八終



